

琉球大学学術リポジトリ

戦後台湾における「沖縄籍民」の引揚げの諸相

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 春菜 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40990

様式第7号

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

戦後台湾における「沖縄籍民」の引揚げの諸相

琉球大学大学院
人文社会科学部

比較地域文化専攻

学生番号

氏 名 中村春菜

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数800字程度）

本稿は、一次資料や各縣市町村誌史等に収録された台湾引揚げ証言、そして筆者自身による聞き取り証言などマルチ・アーカイバルの手法を用い、文字資料のみからは見えてこなかった沖縄籍民の引揚げについて言及した。戦後、外地から日本へ帰郷した日本人は約660万人いたとされるが、その中でも、中華民国側から「琉僑」（沖縄籍を有するもの）と呼ばれた沖縄人3万人は、「日僑」（日本本土出身者）とは区別され、その処遇も引揚げ形態も異なり特殊な体験を持つ集団である。

まず、台湾における沖縄人の引揚げを考察する際には、沖縄籍を有するか否かが問題であったことに留意し、「沖縄籍民」の定義を行った。「沖縄籍」を有するか否かは、中華民国政府に留用された日僑・琉僑以外の人間が、正式な引揚げまで合法的に在台できるか否かに直結していた。そして、この「沖縄籍」を保有している者には「沖縄籍民証明書」が公布され、「内地人」として家族・知人のいない日本本土への強制退去を回避する手段＝身分保障ともなっていた。一つ重要な点は、日本でもなく米国でもなく、中華民国でもなく、いわゆる他者に規定されない沖縄籍民（沖縄同郷会連合会）による「琉僑」＝「沖縄籍を有する者（＝沖縄籍民）」の認定プロセスを以て、沖縄籍民と認定されていたことである。「沖縄籍を有するか否か」で送還の在り方に大きな影響がでていたのである。

そして、在台していた約22万人の旧日本軍人・軍属及び遺家族と一般日僑の引揚げ手順と方法について把握することで、沖縄籍民のそれとはだいぶ異なることを確認した。

正式な引揚げを待つ間、在台沖縄籍民による3つのグループが形成されており、それらは相互扶助の関係であり、また日僑管理委員会や駐台北領事館など公的な機関へも働きかけ、生活の扶助支援や早期帰郷の実現をみた。

なお、沖縄籍民の引揚げが特殊であることの一つに、その引揚げ方法が多岐に渡ることである。現段階では6パターンが確認できたが、殆どのパターンが文字資料には残っていない事象で、残存している文字資料と口述（証言）を多用して、沖縄籍民の引揚げの様相を浮かび上がらせることができたかと考える。

最後に、沖縄籍民の台湾引揚げは、日僑の引揚げとは異なる、特異な集団の引揚げの記憶があり、この集団の引揚げの「体験」と「記憶」は、戦前と戦後をつないでおり、沖縄の戦後史の一旦を担う事象であるという点も指摘しておきたい。